

Title	現代言語学と歴史言語学の橋渡しとしての中世
Sub Title	Insights from Middle English studies : contributions to contemporary linguistics
Author	井上, 逸兵(Inoue, Ippei)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2022
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.123, No.3 (2022. 12) ,p.135- 144
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	松田隆美教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01230003-0135

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

現代言語学と歴史言語学の橋渡しとしての中世

井上 逸兵

歴史語用論の現代言語学的意義

近年、歴史語用論（Historical Pragmatics）という研究分野が盛んになってきた。この分野は、英語学、言語学でも、philology / linguistics としばしば区分される大きな枠組みの接合部分とも言える。現代言語学の知見を歴史言語学に応用したものともされることもあるだろう。本論では、この歴史語用論を含めた文献学的言語学（philology）が資料としてとりあげる中世の言語活動とそれへのアプローチが、たんなる接合的、統合的視点以上の意義があることを論じてみたい。

語用論は現代言語学の一分野で、1960年代の言語哲学者、法哲学者たち（J. L. Austin, J. R. Searle, P. Grice）の議論を言語学に取り入れたものが始まりである。そもそも言語学は、議論の対象を自律した存在としての言語そのものに特化させ、時に「科学」という旗印のもとに、不確定要素が多いように見える言語使用やコミュニケーションは捨象して発展を遂げた。そのような学問的風土の中では、言語の使用、コミュニケーションに関わる語用論という分野が、哲学、社会学などのいわば外からのアイディアで誕生してきたことは言語学史的には必然でもあったとも言える。

語用論は定義的に会話や音声メッセージを材料とするわけではないが、コンテキストを参照する議論が多く、そうなるとう当然とも言えるが、音声情報を含めたパラ言語情報や2者間のやりとりが分析対象になることが多い。歴史語用論というアプローチを考えると、文献のみを対象とするこの分野は単純にはこの部分に難点があるかに見えるし、たしかにそのような面をもっていることは否めない。しかしながら、歴史的な言語資料には、現代の言語学から見ると非常にユニーク

な類いのもが多く、音声情報がないとは言え、歴史語用論には現代言語学から見ても固有の意義があると考えられる。もっとも堀田（2018a）の指摘によれば、音声を重視する現代の言語学の影響からか、歴史言語学者も含めた現代の言語研究者の書きことばへの洞察は近年相対的に鈍くなっているという。このような言語研究の状況は、ひょっとすると皮肉なことかもしれないが、むしろ現代の言語学（linguistics）における書記情報の価値を再考する機会となるかもしれない。

現代言語学の語用論や関連する談話分析や社会言語学的な言語分析は、言語使用を、さまざまなコンテキスト情報や状況、場面情報を参照する議論を行うものであることは先にふれた。歴史語用論にはいわばこの分析デザインの変転にも意義の一つがあると言えるだろう。現存する言語資料を語用論の知見をもちいて分析することによって、逆にその言説がおかれた状況やコンテキストを推論することが可能かも知れない。それは、より大きな時代的背景にまで論考が及ぶことがありうることもこの分野の醍醐味とも言える。本論では、そのような視座から、特に中世という時代において英語の言語使用がどのような様相で実践されたかに着目し、歴史語用論、および社会的言語実践への歴史的アプローチの諸相を論じてみたい。そうすることによって、歴史言語学、現代言語学、中世をつなぐ議論になることを願う。

歴史語用論は、アンドレアス・H・ユッカーが名付け親とされ、1995年に誕生したと言える。ユッカー以前にも歴史語用論的な研究は存在していたが、Juckerを先導者として国際学会が開催されるなど、この分野に注目が集まり、現在高い関心を持たれるようになってきている。

先に述べたように、中世の言語使用を語用論的な議論、分析の対象とする場合、大きな障害と思われることは、音声データが欠如していることであろう。必然的に研究対象は書き言葉を対象にせざるを得ない。ただし、現代の言語学しか知らぬ者にはひょっとして意外に思われるかもしれないが、そのジャンルは多岐に渡っている。このジャンルの多様さそのものも興味深いところで、これは、本論で論ずる分析、研究の図式の変転の好材料でもある。それについてはしばらく措くとして、まずは中世を対象とした歴史語用論、言語学的分析のいくつかを見てみよう。

現代言語学における歴史語用論の萌芽

現代の言語学で、中世を含む歴史的な言語資料を用いたものでもっともよく知られているのはブラウンとギルマン (Brown and Gilman 1960) だろう。英米系の社会言語学のいまや古典とも言えるこの論文は、フランス語、イタリア語、ドイツ語における呼称の歴史的意味関係を追跡し、社会構造、集団イデオロギーとこれらの意味論の間の関連性を示している。インタビュー、アンケート、劇、法的文書、手紙などの使用に関する一次証拠から5つの印欧語における二人称代名詞T形 (単数形---フランス語のtuのように現代では親しい間柄で用いるとされる) とV形 (本来、複数形---フランス語で言えばvousのように丁寧な形式とされる) の対立と意味関係の変化、発達を論じたものである。個人が一貫して用いる代名詞のスタイルが、いかにその人の階級的地位や政治的見解を表し、このスタイルを変化させることでいかに一過性の気分や態度を表現することができるかを説明している。

この論文では、それ以外の議論として、ラテン語におけるVの進化について、帝国が二つに分かれたとき、それぞれの皇帝をVで呼んだというのが第一の説であることを指摘している。その結果、Vの使用は権力のメタファーとして関連付けられるようになり、それは非相対的権力意味関係と呼ばれる言語規範のパターンやセットとして確立されたとされる。そして、中世ヨーロッパにおける権力のヒエラルキーと、その権力的意味関係が、親が皇帝である家族にも一般化したことを論じている。一方で、代名詞が相互的で対等なアドレスの規範も存在したという。ヨーロッパでは何世紀にもわたって、力の弱い者同士の非相互的なT/Vのルールが守られてきたが、次第に親密さのTと形式的なVのダイナミズムが連帯 (solidarity) の意味関係に変化していったのである。ただ、この意味パターンは何世紀も前から明確に確立されていたわけではなく、中英語ではTとVの間に多くの不可解な変動があったという。単複の対立が権力の有無というレベルに変化し、さらには連帯の有無という次元が問題となった。

『カンタベリー物語』における呼称

中英語 (Middle English) の資料は写字生による文語的記録という類いのもの

が中心であり、14世紀後半から、チョーサーの『カンタベリー物語 (Cantetrbury Tales)』を代表とする中世英文学が開花する。シェイクスピア前のこの時期は、標準語らしきものが出現する前の不安定期であったともされ、差別的なものを含む各言語変種に対する意識やその使い分け、英語の純粋性に言及するなど、英語とその変種に対する意識が芽生えた時期だと言える。(児馬 2018)

ユッカー (2011) によれば、単数として用いる英語の二人称代名詞である親称の *thou* (T形) と敬称の *you* (V形) の対立は17世紀までに確立していたという。『カンタベリー物語』の登場人物たちは、お互いの社会的地位の高低、人間関係がいかなるものであるかに応じて、このT/Vの代名詞を使い分けている。ただし、同じ登場人物同士の間でも、状況に応じて *thou* / *you* の使い分けを変えているようだ。一時的な「状況における地位」が高くなったときには相手に対して *thou* を用い、一時的に低くなったときには *you* を用いるのである。

このような認識は、現代言語学の相互行為性の議論につながるものであり、代名詞の使用がよりコンテキスト・センシティブであることを示している。これは、まさしく現代の社会言語学の基本的な研究スタンスになっている。

現代言語学への貢献・歴史言語学からの貢献

音声データがないという歴史語用論の一見弱点と思われることの補填が逆にこの時代の背景を紐解くキーになるようにも思われることは先に述べた。歴史語用論では「話し言葉の記録 (written records of spoken language)」は最も重要な言語資料の一つである (Jucker, Andreas H. and Irma Taavitsainen (eds.), 2010)。例えば、演劇のシナリオ、文学作品中のダイアログ、親しい間柄での書簡が当時の話し言葉を反映していると考えるのが研究スタンスの前提である。そして、これらはこの時代の中心的な言語メディアであったことも同時にうかがい知ることになるだろう。中世以降は、さらに裁判所での記録も言語資料となるという。

これらの研究群やアプローチは、歴史言語学の現代言語学への貢献の道筋を示すものでもある。質的研究と量的研究のバランス、コーパスの構築 (ヘルシンキコーパスの充実を含む・アノテーションの拡充)、通時的ポライトネス研究、言語使用の普遍性の追求 (敬語体系を持つ日本語・韓国語からの貢献は大きい) など、多くの糸口がある (堀田 2018b)。

また、この時代の、英語、フランス語、ラテン語の言語接触は、現代言語学にも示唆するところが多い。Ingham (2010) の議論によれば、アングロ・ノーマン語は少数派ではあるが、文化的優位性を享受していたため、当時の英語におけるフランス語ベースの構造の使用は、より広い英語圏のコミュニティにおいて威信ある変種と見なされたという。このような、二重、ラテン語も含めれば三重の構造と相互作用は、現代の多言語状況にも示唆することが多い（堀田隆一氏個人談話）。

手紙の相互理解性と相互行為性

Tiisala (2004) は、スウェーデン当局とハンザ同盟評議会との書簡を通じて中世のバルト海北部ヨーロッパの権力構造を分析したものである。以下、この中の現代の言語学から見てとりわけ興味深いと思われるティーサラの議論を取り上げてみよう。

手紙は、ラテン語、低地ドイツ語、スウェーデン語の3つの言語で書かれている。中世の手紙の書き方は、*summae dictaminis* と呼ばれる様々な教本に書かれているモデルに従っている。これは中世社会の階層性を反映したもので、手紙の送り手と受け手を社会的地位によって分類し、ある集団から別の集団への宛先を指示するものである。ヨーロッパにおける手紙の書き方のルールのはほとんどは、大陸全体で共有されていたという。

この研究で、現代の言語学的に興味深いのは、ハンザ同盟時代にこの地域で交わされた個人的な書簡における言語の選択と、その言語の選択がこの地域の権力構造をどのように反映しているかだ。多言語状況における言語選択は、現代の言語学においても重要なトピックの一つである。ある言語共同体が他の言語共同体に対して、共有していない言語で手紙を書き、理解されることを期待する、というような言語状況はどのようにして可能になるのだろうか。現代言語学にも示唆するところ大であるのは、両者の参加者は、それぞれのシステム内の多様性に慣れており、コミュニケーションにおける「ノイズ」を今日よりも多く許容することができたと見られることだ。相手が自分の母語に近い、つまり類型的にも語彙的にも似ている別の言語で返答してくるような状況も受け入れることができたという。このような言語状況は現在のスカンジナビアでも珍しくないという。い

わば、「アバウトさ」を持ったコミュニケーションにおける相互理解性はまさしく現代の異文化コミュニケーションにも投げかける問いだ。すでに起こっていることだが、自らの母語とは異なった言語でのコミュニケーションには必ずある種の、そしてある程度の不完全性を伴っている。より現代的な問題は、機械翻訳を介したビジネスコミュニケーションである。テクニカルコミュニケーションと呼ばれるこのタイプの伝達行動では、すでに100%の翻訳を期待していないという領域がある。

手紙のコード・スイッチング

また、ティーサラによれば、このスウェーデン語の手紙は、完全にスウェーデン語で書かれているわけではなく、かなりの量のコード・スイッチングが含まれている。ハンザ同盟の資料の中には、完全にスウェーデン語で書かれた手紙はほとんど見当たらないという。ラテン語のフレーズは、学問の言語としてのラテン語の威信がまだ高かったため、手紙に文体的なニュアンスを与えるために使われたと解釈することができる。コード・スイッチングは言うまでもなく、現代の言語学の様々な領域において関心の的となっている。

呼称の選択は、先のBrown and Gilmanに見るように、社会言語学、語用論の基本トピックの一つだが、コード・スイッチングとの関連という文脈においても興味深い。集団それぞれの人々はどのように呼ばれるべきか、そしてどのような形容詞を使うべきか、受信者に宛てたときに送信者と受信者の名前をどのような順番で並べるべきか、といった厳格なルールがあるという。

summa dictaminisは、中世社会における明確なヒエラルキーが反映された教本である。礼儀の面では、下位者から上位者への敬意表現ということだけでなく、その逆の意味でも重要である。つまり、高い地位にある者は、低い地位にある者に対して礼儀正しく接することで、自らの優位性を示さなければならない。傲慢な態度は絶対に避けなければならない、下位者である相手に対しても敬意を示すことが重要である。これらも現代の相互行為の言語学に通ずる視点である。

現代の語用論的視点から見ると、かなり特異で、かつ新奇なトピックになるであろうと思われるのは、形容詞の選択である。ロキンジャーによると、敬語の質は、適切な形容詞の選択に現れるという。形容詞は送り手の受け手に対する敬意

を示すべきものであり、関係する者の社会的立場や受け手と送り手の関係によって選択されなければならないと述べている (Rockinger, 1863: 56)

時差コード・スイッチング

また、当時の手紙によるコミュニケーションを表すものとして、時差コードスイッチングとでもよぶべき言語事象がある。さらに、ティーサラの議論を続ければ、初期の手紙の中で、スウェーデン王室の代表が書いた手紙の中でよく使われているのは、*Amicabili in Domino semper salute premissa*「神における（常に最初の）親しい挨拶」というフレーズであるとのことだが、ラテン語の「挨拶 (*salutatio*)」の後に、低地ドイツ語とスウェーデン語の「宛先 *inscriptio*」が同じフレーズの中にあり、本文はスウェーデン語であるというように、二重にコード・スイッチングがなされているのである。その後、この長いラテン語のフレーズは、しばしば「最初の挨拶 (*Salute premissa*)」あるいは「挨拶の後 (*post salutem*)」と短縮される。このフレーズ（とそれに相当する低地ドイツ語 *Na de grote*）の解釈のヒントは、古典ラテン語における時制の使い方にあると思われる。手紙の形式は、手紙を受け取る側の立場に立って、時制が手紙を読む時間と一致するように選択されているのである。本論で時差コード・スイッチングと呼ぶゆえんである。

加えて、ハンザ同盟の手紙文とその定型表現についてのティーサラの指摘で興味深いのは、書簡の性質上、形式的な規則がすべて厳格に守られる必要はないにもかかわらず、書簡に用いられているドイツ語やスウェーデン語の方言は、用いられている定型表現が明らかにラテン語の影響を受けていると示唆されていることだ。さらに、使われている表現は必ずしも高威信のものではなく（いわゆる上品でなく）、論争が行われるような手紙でも、礼儀のルールは注意深く守られているという。当時の書簡コミュニケーションの慣習と規範をうかがい知ることができて興味深い。

悪態と冒瀆の発語媒介行為

Reed (2020) の議論も、中世の言説ならではの論考として興味深い。リード

は、中世後期の教育対話集『Manières de langage』を手始めとして「キリストの手足による (per membra Christi)」という悪態、冒瀆の機能について論じている。中英語とアングロ・ノルマン語では、キリストの体の部位に悪態をつくという、より広い現象が見られるという。現代の言語学から見て、興味深いのは、言語行為論 (Speech Act Theory) でいうところの、発語媒介的な (perlocutionary) 反応を分析対象としていることだ。従来、発語内的な (illocutionary) 効力を問題とする現代のこの分野ではとりにくいアプローチかもしれないところを、この言語資料の特性を生かした視点としているのである。

現代の言語学では、悪態、冒瀆といった言語行為を研究対象にすることはあまり多くない。言語学の学問上の倫理は、暗黙裏のものだが、おそらく現代の言語学であれば、際だって特徴的な研究になるのだろう。そのあたりのユニークさもこの時代の歴史語用論の研究対象のおもしろさだ。

さらにリードの議論では、神とキリストに誓いを立てる際の、感情的な間投詞の機能にも注目し、この行動が中世の中頃から後半にかけての実用化の長い変化のプロセスに関わると想定している。この研究は、中世英語とアングロ・ノルマン語の間に双方向の影響経路があるという立場をとることになる。

15世紀初頭の対話の言語資料として、Manières de langageとして知られるものがある。これは、中世後期の会話フランス語の研究の中心であるが、現代の行動、言語行動に対する態度についても明らかにすることも多く、社会言語学的にも意義のあるものである。これらの対話は、宿屋で部屋を確保する方法、道を尋ねる方法、さらに媚びる方法、侮辱する方法、物々交換の方法など現代から見ても興味深い。社会的文脈における意味と、それに基づく語用論研究の豊富な情報源を提供するものである (Reed 2020)。

書記情報しかないとは言え、むしろ現代の言語学では扱いつらい、感情の側面に踏み込んだ資料が少なくないことは、これらを扱う意義の1つとして数えることができる。現代では、感情や発語媒介行為のような明示化しづらい言語事象の側面は、研究対象として避けられる傾向があった。もちろん情報として十分ではないところが多いが、アプローチ、切り口のユニークさは、現代言語学から見ても見直されてもよいだろう

終わりに

歴史語用論は、たしかに分野としては若く、まだ始まったばかりとも言える。社会言語学やコーパス言語学など関連分野と連携し、今後発展することが期待されているなどとも言えるかもしれない。そう考えると、現代の言語学が一方向的に知見を歴史言語学に提供する図式にも見えてしまうが、それは必ずしも適切ではない。現代の言語学の言語資料は、例えば多くのコーパスが意図しているようにバランスのとれたデータ採取 (balanced corpus) を旨としている。むろん、研究の目的を考えると、それは妥当で合理的なものであろう。しかしながら、書記情報から、言語の音声的な面を復元し、推論する研究手法にも典型的に見られるように、書かれたデータの解釈や文脈の推定などは現代の言語学にとっても示唆するところは多いはずだ。それこそ、まさしく文献学 (philology) の真骨頂である。この互恵関係こそが今後の両分野双方の発展に寄与することはまちがいない。歴史語用論はその橋渡しとしての役割を担っているように思う。

参考文献

- Brown, R and A. Gilman. 1960. *Style in Language: The Pronouns of Power and Solidarity*. In Sebeok, T. A. (ed.) *Style and Language*. MIT Press, pp. 253-76.
- Hernández-Campoy, Juan M. 2016. "Authorship and gender in English historical sociolinguistic research: Samples from the Paston Letters". *CurrenTrends in Historical Sociolinguistics*. De Gruyter Open Poland, 2pp. 108-142.
- 堀田隆一. 2018a. 「書記体系の変遷」服部義弘・児馬修編『歴史言語学』(朝倉書店)
- . 2018b. 「意味変化・語用論の変化」服部義弘・児馬修編『歴史言語学』(朝倉書店)
- Ingham, Richard. 2010. Later Anglo-Norman as a contact variety of French? In Richard Ingham (ed.), *The Anglo-Norman language and its contexts*, 8–25. Woodbridge: Boydell and Brewer.
- Jucker, Andreas H. and Irma Taavitsainen (eds.). 2013. *English historical pragmatics*. Edinburgh University Press.
- ユッカー, アンドレアス・H・「チョーサーの『カンタベリー物語』における呼称」(訳: 東泉裕子) 高田他編『歴史語用論入門 過去ユニケーションを復元する』
- 児馬修 2018. 「英語史概観」『歴史言語学』(朝倉書店)

- Rockinger, Ludwig. 1961 (1863). *Briefsteller und Formelbücher des elften bis vierzehnten Jahrhunderts I–II*. New York: Burt Franklin. (Originally published in *Quellen und Erörterungen zur bayerischen und deutschen Geschichte*. Neunter Band, erste Abteilung. München 1863).
- Reed, Emily. 2020. A pragmatic study of oath swearing in late Anglo Norman and Middle English. *Linguistics Vanguard*, 6 (s2): pp. 20180057. <https://doi-org.kras.lib.keio.ac.jp/10.1515/lingvan-2018-0057>
- Tiisala, Seija. (2004) Power and politeness: Languages and salutation formulas in correspondence between Sweden and the German Hanse. *Journal of Historical Pragmatics* 5 (2): 193-206.